加害者家族の人権

大牟田市立右京中学校　二年　阿部友飛

近年でも連日のように報道されているように、日本国内では犯罪が多発している。犯罪というものはいつも加害者と被害者を出す。それが殺人事件である場合、被害者は既に死亡しているので、加害者と被害者遺族に注目が集まる。しかし、そこにはもう一つ、その犯罪の犠牲者ともいうべき人々が存在するということを、私はあることをきっかけに知った。

それは二〇〇九年に公開された日本映画「誰も守ってくれない」を鑑賞したときのことである。この映画は、殺人犯の妹になった少女と彼女を保護する刑事の逃避行の物語で、過熱するマスコミ報道と加害者家族をテーマにした問題作である。そう、加害者と被害者遺族、そしてもう一つの犯罪犠牲者ともいうべき人々とは、加害者家族である。多くの人が「自分は加害者にはならない」と思っているだろうけど、加害者にはならなくても、身内が罪を犯し、加害者家族になる可能性はある。子どもが罪を犯したという親、夫や妻が罪を犯したという配偶者、父親や母親が罪を犯したという子ども、さらには親戚が罪を犯したという人まで含めると、一つの事件には多くの人間が関係している。

その加害者家族は社会的に追い詰められていくことが多く、身内の犯罪のため仕事を失ったり何度も引っ越したり、子どもがいる場合は転校を繰り返さなければならないなど、通常の生活が送れなくなる。さらには一日中鳴り止まない無言電話、インターネットによる個人情報の暴露、自宅への落書きなどといった誹謗中傷が行われる。また、その辛い現実に耐えきれず自殺する人も多く、僕が観た映画の中では殺人犯の親が自殺する。

加害者自身は刑務所の中で、ある意味では守られているのに対し、加害者家族は「世間」に取り囲まれてしまう。僕がこの映画で一番怖いと感じたのも、「世間の目」である。少なくともその事件が話題になっている間は、誰もがその事件のことをより深く知ろうとする。背筋が寒くなるほどの世間の暴走。はたして本当にそれでいいのだろうか。殺人者を育ててしまった家族は全員悪で、彼らはどうなっても知ったことではないというのか。

確かに絶望のどん底にいる被害者にとっては、加害者の家族が保護されて安定した生活を送ろうとしていることが許せないのは当たり前だ。加害者家族の人権の保護に関してはいろいろな意見があると思う。実際に僕もこの映画を観るまでは、加害者家族の支援には消極的な考えであった。しかしながら、被害者家族の支援と加害者家族の支援は、どちらも一つの事件からこれ以上、犠牲者を出したくないという点で共通していると思う。

加害者家族の人権保護には理解に苦しむ人が多いとは思うが、もう一度「人権」というものを見つめ直してほしい。加害者の家族だって僕たちと同じ人間である。誰一人として欠けてはならない、全ての人々の「人権」が保障される

べきであると考える。そのためにも、第一に加害者家族の存在を、そして彼らを取り巻く社会現象を、私たちが知ることが大切であり、その理解が加害者家族を人権侵害から救う一歩に繋がると思う。